

AMIEL



sh u
with

up

PEPSI-COLA

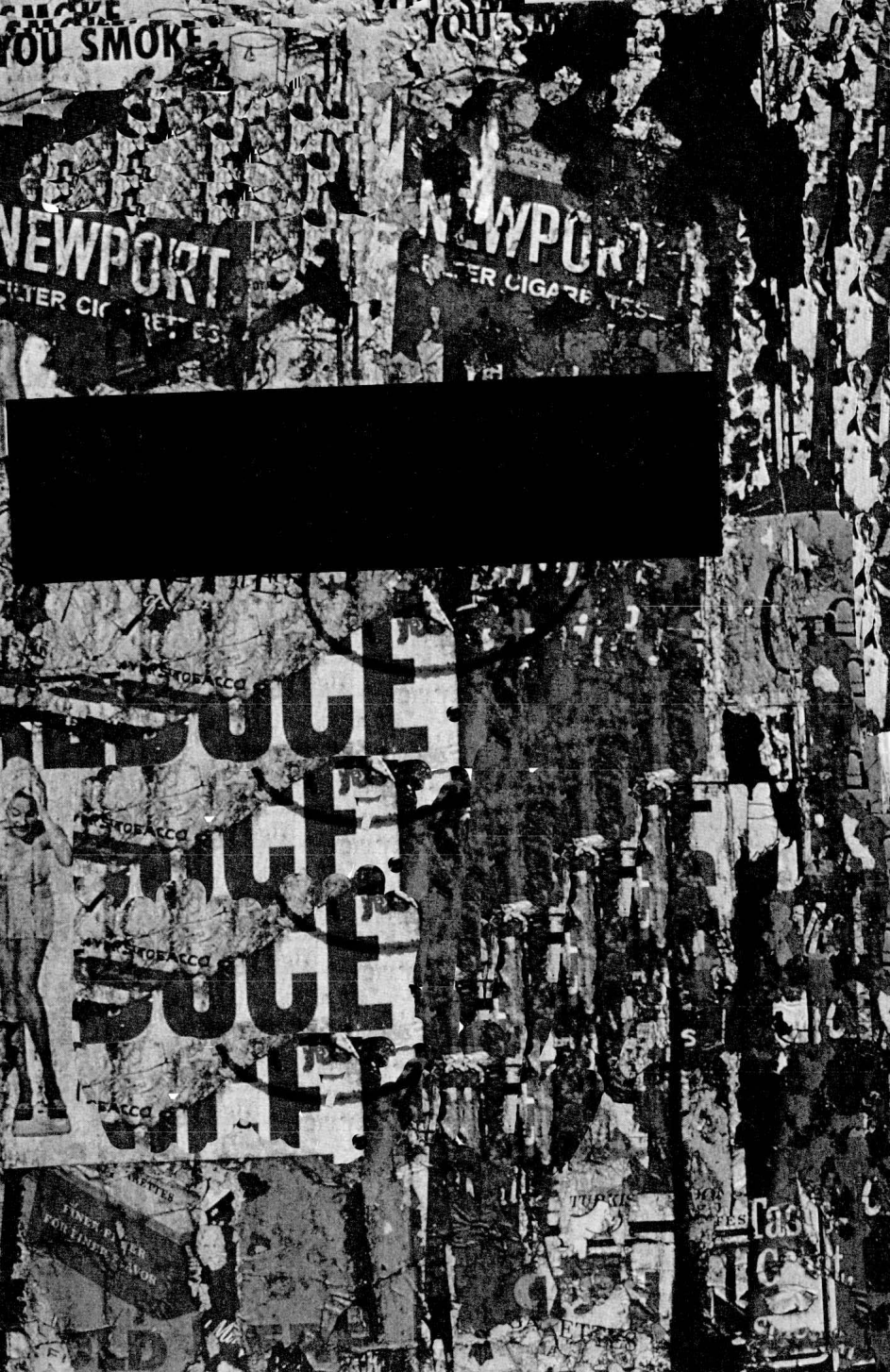
Smoke
VICEROY



Have a
Peps



Coca-Cola



スローなブギにしてくれ

昭和五十一年三月十日 初版発行

著 者 片岡義男

発行者 角川春樹

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二ノ十三ノ三 郵便番号一〇二
振替東京一九五二〇八 電話(03)二六五―七一一

印刷所 新興印刷株式会社

製本所 宮田製本所

善丁・乱丁本はお取替えいたします

0093-872159-0946(0)

目次

スローなズギにしてくれ——三

モンスター・ライド——五

ハートブレイクなんて、へっちゃら——七

ひどい雨が降ってきた——一四

青春の荒野ってやつ——一七

表紙・扉写真
カバ―写真
装幀
石岡 英子
斎藤 一男
内藤 忠行

スローなブギにしてくれ

少年が送話口に声をはりあげていた。

「もうちいとぶちとばしてから、ほいじゃそっちへいくよ！」

第三京浜の東京にむかう三車線にちらと目を走らせ、自分のオートバイに視線をもどした。

「ああ、わかったよ」

そう言ってからしばらく黙ったままできて、

「わかったよ」

ほんと投げだすようにくりかえし、少年は電話を終った。

電話機のある柱を背にして第三京浜にむきなおり、デニムのみじかいジャケットのえりのさを両手でつかんだ。

こちら側の車線と、分離帯のむこうの下り車線を、少年は交互にながめた。

夕暮れのコンクリートのハイウェイを、自動車がひっきりなしにふっ飛ぶように走っていた。

風のない七月の日没にちかい時間。排気ガスがたちこめ、いっさいがおぼろな灰色にかすんで見えた。鋭いタイアの音が、連続して地鳴りのようにつづいていた。

ジャケットのえりをつかんだまま、少年は自分のオートバイのほうに歩いてきた。避難エリアのまんなかに、ホンダCB500がとめてあった。

十八歳、一メートル六三の背だけに五〇キロを割る体重。歩き方はとても軽い。はき古したブルージ

ーンズに、ヒールのほとんどないデザート・ブーツ。ジャケットの下にはミッキーマウスのTシャツ。髪はポマードでオールバックだ。

左の車線を、白いムスタング・マッヘーが走ってきた。急ハンドルでノーズを振りこむように、避難エリアに入ってきた。スピードは、時速で八〇くらいにあげたままだった。

「あっ！」

少年は声をあげた。ムスタングが自分のオートバイをはねる、と思ったからだ。

ムスタングはまた急ハンドルで方向をなおし、CB500をすれすれに通過した。内輪差でひっかけるか、と思えたが、あやういところでぬけた。

「この馬鹿たれめが！」

自分のほうへ走ってくる白いムスタングを見すえた少年は、ドライバーを怒鳴りつけようとして身がまえた。

運転席のドア・ガラスが降りていた。派手なプリント模様の長袖シャツの左腕が突き出され、少年のほうになにかをほうり投げた。

ほうり投げられた丸っこいものが自分のすぐ前を斜めに飛んでいくのを目のはじにとらえ、少年は、猛然と走り去っていくムスタングを見送った。避難エリアから後続車におかまひなしにムスタングは車線に飛び出し、ハイウェイにせまっているコンクリートの斜面のむこうに見えなくなった。

「馬鹿やろうめえ！」

少年は、オートバイに走った。ニャーオ、というかぼそい鳴き声を、そのとき、自分のうしろに聞いた。

走りながら、ふりかえった。小猫が一匹、口をあけて鳴き、コンクリートのうえを歩いていた。四本の脚と腹が白く、あとは黒い毛の、小さな猫だった。

ニャーオ、とまた鳴いた。下顎のピンク色のなかに生えている小さな白い歯が見えた。

「あのアメ車のとんちきめ、猫なんかほうりやがって」

走ってひきかえした少年は、猫を片手にすくいあげた。やせた猫だった。あばら骨が、少年の掌にじかに触れるような感じだった。

猫は、また鳴いた。

「わかったよ」

少年は言った。これが口ぐせだ。

「鳴きがいのあるとこまで、つれてってやるよ」

少年はオートバイに走った。

皮のサドルバッグの片方を開き、そこに小猫を落としこんだ。

「しばらくここに入ってる。な。死ぬときはいっしょだ」

キーをまわしてセルを押し、始動はそれ一発。ミラーにかけたヘルメットをとり、かぶって顎ひもをしめた。まだフルフェースが売り出される以前の、赤いベルのヘルメットだ。

サイドスタンドを蹴りとばしながらアクセルの開閉をくりかえし、ふりかえって後続車のタイミングをとらえ、ぼんとクラッチをつないだ。

排気管から爆音がひと噴きしたとき、少年のまたがったCB500は、中央の車線に飛び出していた。直進できる位置に自分をきめ、早いけれども正確なタイミングで、一速の五〇〇〇回転から四速にか

きあげた。

音を頼りに八〇〇〇を三〇〇ほどこえたあたりでホールドした。ギアはすでに五速だ。ミラーのぶれが、不思議なほどびたりととまっていた。

コンクリートの路面も、両側の単調な光景も、いっさいが自分のうしろへ吹き飛んでいた。風切り音と、ほかの自動車の音が、ヘルメットのなかにこもった。

スピードメーターの針が、大きく右にかしいでいるのが、一瞬、見えた。眼球を下へ動かすその一瞬が、すさまじくこわい。

風圧に体がばらばらにほぐれて飛んでしまいそうだ。視界のなかにあるものすべてが、うしろへ飛び去っていく。自分もそのなかにまきこまれ、吹き飛んでしまうのではないのか。

少年はアクセルをすこしずつ閉じた。スナッチをかえたころ、スピードメーターの針は直立した。これで時速一〇〇キロだ。

いったん高いところへしゃにむにほうりあげておいて降りてくると、時速一〇〇キロがその半分ほどにしか感じられない。

中央の車線を走っていく白いカラーラに追いつがった。

ここでチェーンが切れたらどうしようと思いつながら、いさぎよく右肩からすんと落とすようにして倒し、スロットルをかけてあっさりぬぎ去った。

そのまま右の車線を少年は走った。一一〇、一一五、とすこしずつあげていくと、前を走っていく車が、面白いように自分のほうへたぐり寄せられてくる。

ダークグリーンの車が、右の車線にいた。太いタイヤをはいたギャランのGT0だった。

充分に追いすがってから、右のフラッシャーをつけ、少年はあおりたてるように自分のヘッドランプを点滅させた。

やがて、意が通じた。GTOは、中央の車線に入っていった。入りきったとき、少年の濃い紫色のCB500が、滑り出るようにぬいていった。エンジン回転があがっていくときの4サイクルの、気味のいい音が、ほんのわずかな時間、うしろのこり、かき消えた。

少年は、前方を走っているはずの白いムスタングの尻をさがした。白っぽい車はいくつか見えた。だが、ムスタングは見当たらなかった。

ミラーで後方をたしかめるとほぼ同時に、少年は、中央の車線に出た。トラックにじゃまされ、右側からでは見えなかった左の車線が、遠くまで見渡せるようになった。

ムスタングの、低く沈んだ尻が、見つかった。やはり中央の車線にいるトラックのかげになっていたのだ。

左の車線が、すいていた。そちらへうつり、再び、少年はエンジンの回転をひっぱりあげはじめた。サービス・ファクトリーから出てきてまだ間のないこのCB500のエンジンは、気持ちよく噴きあがった。回転のあがりのよさを、ひっぱりで充分に楽しんでから、少年はシフトしていった。

白いムスタングは、時速八五キロほどで流していた。一直線に追いすがるのは、造作なかった。

だが、少年は、左の車線走るのが嫌いだった。

中央か右のレーンを使い、追いこしをくりかえした。

ムスタングは、そのあいだずっと左に寄ったままだった。もうすこしで、中央の車線の少年がムスタングとならんで走れそうだというとき、一度だけ、中央の車線に入ってきた。テールパイプから煙を路

面に向かって噴出させながら走っている軽自動車を追いぬくためだった。

ムスタングのすぐうしろについて、少年は中央の車線を走った。

うしろの窓からムスタングの車内が見えないかと思ったが、窓は小さすぎた。

ムスタングは、また、左に寄った。

自分のレーンの前方に、トラックがいた。トラックは、すこし近すぎた。

中央の車線からムスタングの右へ寄っていたいき、おどしをかけたかった。だが、近すぎるトラックを見て、少年はそれを断念した。

うしろにくっついてしばらく走ろうと思い、左の車線に入り、アクセルをすこし閉じ、ムスタングとのあいだに距離をとった。

そのとき、灰色っぽい小さなカタマリが、また、ムスタングの左の窓から、外へほうり出されてきた。それは小さな拋物線を空中に描き、左端の鉄の手すりのうえに落ちた。第三京浜が橋になって住宅街の谷を渡っている地点だった。

オートバイで走りぬけながら、小猫が鉄の手すりをこえてむこうへ落ちていくすべてを、少年は視界の左端にとらえた。

背を丸め、四本の脚で手すりのうえに落ちてきた猫は、慣性を止めようとして、手すりの表面に必死に足を踏んばった。

だが、足は鉄のうえを滑り、猫は手すりのむこうの空中に飛び出ていった。

首をまっすぐにのばして突っ張り、こわばった三角の耳が直立していた。のばした首に、筋が一本、うきだして見えた。

猫は、口をあいて、下へ落ちていき、手すりにかくれて見えなくなった。

「くそつたれめえっ！」

声に出してそう言った少年は、中央の車線に飛び出ようとした。だが、トラックの重い大きな尻が、ムスタングのすぐさきにあった。

思いとどまり、そのかわりにムスタングとの距離をつめ、少年はホーン・ボタンを何度もたてつけに押した。張りのない、音量のすくないホーンの音は、少年がボタンを押すたびに、むなしくうしろへ吹き流された。

右の車線に出てさきまわりし、ムスタングの前につこうか。と、少年は思った。

そこまですることもない。

思いなおすと同時に、ムスタングとの距離をすこしはなした。

やがて、前方に、避難エリアが見えてきた。エリアの手前から、第三京浜は右へ大きくカーヴを描いている。

ムスタングは、左のウィンカーを出した。反射的に、少年も、自分のウィンカーをつけた。

スピードを落とすムスタングにあわせてエンジン・ブレーキをきかせ、車線の右に寄った。ムスタングが避難エリアに入ったら右からぬいていき、その前にオートバイをとめるためだ。

ムスタングは避難エリアに入っていた。その右をかすめてさきに出ようとした少年は、アクセルを開きかけて本能的に右手のスナッチを止めた。

このアメ車は避難エリアに入りはしたけれど止まらずにぬけていく、と、少年はとっさに知った。十六歳までに無免許でさんざん乗りまわし、免許をとってから毎日のようにオートバイでハイウェイを

走っているうちにいつのまにか養われた、正確なカンだった。

エンジン・ブレーキに前後輪のブレーキをかさねあわせ、少年は Mustang とのあいだにさらに距離をとった。

Mustang は、さきほどおなじように、深く切りこむように避難エリアへ入っていった。エリアの中央ちかくまでいき、右側のドアが開いた。

若い女性がひとり、ドアの外へ押し出されてきた。Mustang は、スピードを落としてはいるけれど、走りつづけたままだ。

女性は、みじかい悲鳴をあげた。そして、両腕や両脚を必死にあやつってもがきながら、開け放ったドアの外へ落ちた。コンクリートのうえに、もういちど悲鳴をあげ、彼女は転がった。

そのすぐわきを、Mustang は、走りぬけた。まっすぐに走っていき、半月形の避難エリアの外へ出た。

左の車線では、車の流れが、とだえていた。白い Mustang は難なく車線にもどり、加速した。

左のドアから、バスケットがひとつ、うしろにむけてはうり出された。エリアの端に、そのバスケットは転がった。

減速しながら CB 500 でやってきた少年は、転がったままの女性の手前でオートバイをとめた。降りると同時にサイドスタンドを出し、ヘルメットを脱ぎつつ、Mustang を追ってエリアの端まで走った。

走り去っていく Mustang のナンバーが、かろうじて読めた。練馬ナンバーだった。そのあとの数字のつながりも読んだのだが、少年はすぐに忘れた。

「ひでえ奴もいるもんだ」

低くつぶやき、少年は、転がっているバスケットをひろいあげた。

コンクリートのうえにすわりこみ、両手について女性は泣いていた。彼女のそばに、少年は、しゃがんだ。

「だいじょうぶかよ」

しゃくりあげている彼女は、かすかにうなずいた。

「怪我はしてねえみたいだな」

彼女は、顔をあげた。

自分とおなじくらいの年齢ではないかと、少年はその顔を見て思った。

着せかえ人形が着るような、せつない花模様のひらひらのブラウスのうえに、長いエプロンのような、胸あてのついたスカートをはいっていた。

「だいじょうぶかよお」

彼女は、うなずいた。

「だいじょうぶなら、立てよ」

うながされて、彼女は、ぶざまに立ちあがった。

四つん這いになって尻をさきに高くあげ、両手をひざに当てなおし、背をのべした。泥のついている両手で、涙に濡れている顔をぬぐった。顔には、泥で模様ができた。

「しょうがねえなあ」

少年は、バスケットを差しだした。

うけとったまま目を伏せ、彼女は肩をふるわせて、しゃくりあげた。
走り去っていく自動車のなかから、ふたりに視線が飛んだ。

「ここで泣いててもしょうがねえや。乗るか？」

少年が指さしたオートバイを見て、彼女はうなずいた。

*

バスケットを持ってトイレへいったきり、さち乃は、なかなか帰ってこなかった。
彼女の名前は、さち乃、という。

オートバイにタンデムで乗り、第三京浜を出てきながら、少年は彼女の名前をきいたのだ。

「ルネ」

と、彼女は、こたえた。

「なにい？」

「ルネ、っていうの」

「冗談じゃねえや。ほんとの名を言え」

さち乃という古風な名を、彼女は、気まり悪そうにこたえた。乃、の字を彼女は指で彼の背に書いた。

「わかる？」

「わかる。俺は、ゴローというんだ」

「ゴロー？」

「ああ」